

# I N D E X

第27回全国大会の御礼.....	2
第27回全国大会の報告.....	2
冬の合宿研究会のご案内（第三報）.....	11
大学教員のためのFD研修会（ワークショップ）のご案内.....	12
研究会の開催「テーマ：地域連携と教育・学習環境」.....	13
研究会の発表募集「テーマ：情報モラル教育の実践」.....	14
研究会の開催報告「テーマ：変動社会における教員養成と教師教育」.....	15
論文誌 特集号 論文募集.....	16
「特集：大学教育の改善・FD」のご案内（最終報）	
ショートレター増刊号論文募集のご案内（第二報）.....	17
研究奨励賞の推薦依頼（最終報）.....	18
新入会員.....	19

## 日本教育工学会第27回全国大会の御礼

大会実行委員会委員長 永井正洋（首都大学東京）

日本教育工学会第27回全国大会は、首都大学東京南大沢キャンパスにて、09月17日(土)～19日(月)の3日間に渡り開催されました。本年は未曾有の大震災があり、計画停電等が行われた春先には、本当に大会を開催できるのかと日々、心配な時期もありました。結果的には1,000名を超える参加者の皆様方をお迎えすると共に、例年を超える数の企業展示が行われましたが、このように盛況に大会を終えることができましたのも、偏に永野会長、そして室田大会企画委員長をはじめ、大会企画委員の先生方、そして多くの皆様方のお陰と感謝申し上げる次第です。

昨年、実行委員長を仰せつかり、実行委員会の編成を考えることになりましたが、まず思い浮かんだのは機動力のある若いパワーの活用でした。しかしながら、それ以上に考えたのは、実に様々なお立場や仕事の方々が本大会にいらっしゃるということでした。したがって、実行委員としてベテランの方や、学校教育、企業の経験のある方にも入っていただくことをお願いしました。また、実行委員の下、業務を行うアルバイト学生には、大学での授業実践においてチューターとして活躍している学生を核に、60余名からなるアルバイト部隊を編成しました。大会期間中、良い対応であったと多くの評価を頂戴しましたが、平素からの彼らの主体的でスチュワードシップ溢れる活動が実を結んだものと大変、嬉しく思っております。

首都大学東京 南大沢キャンパスは、紅葉舞う季節が終わり、初冬の落ち着いた雰囲気になりました。全国大会の名残は、いくつかのポスターと時折見かける学生が着ている大会スタッフTシャツくらいとなり、懐かしささえ覚える今日この頃です。何かの折に本大会のことが語られ、議論されるなら望外の喜びです。

来年度の開催地は、長崎大学であると全体会で藤木先生よりご紹介がありました。日本を代表する美しく歴史ある街、長崎にて、本大会が一層、充実し盛大に行われますことを祈念いたしまして、御礼のご挨拶とさせていただきます。

## 日本教育工学会第27回全国大会の報告

大会企画委員会委員長 室田真男（東京工業大学）

日本教育工学会の第27回全国大会は、09月17日(土)から19日(月)の3日間にわたり、東京都八王子市の首都大学東京 南大沢キャンパスを会場に開催されました。03月11日の東日本大震災から約半年後の開催ということもあり様々な懸念事項がありましたが、1,000名を超える多くの教育工学関係者の参加を賜り、盛会となりましたこと心より御礼申し上げます。発表件数は438件（シンポジウム：13、課題研究：43、一般研究（口頭）：261、一般研究（ポスター）：112、International Session：9）、そして10件のワークショップという、例年どおり大規模な大会となりました。

永井正洋大会実行委員長をはじめとするスタッフの方々には、朝のさわやかな挨拶から始まり、きめ細やかな配慮で参加者を迎えていただき、気持ちよく発表や討論を行うことができました。懇親会では、西東京市立栄小学校の6年生13名の皆様による「七頭舞（ななずまい）」による出迎えがされるという素晴らしいプレゼントもありました。関係の皆様には厚く御礼申し上げます。また、予算面につきましても、皆様のご努力をくださったことに感謝申し上げます。

今大会の特徴としては次のことが挙げられます。(1)「学会として東日本大震災のような危機的状況にどのような対応ができるのか」に関わる3つの試みがなされました。特別講演として上野淳氏（首都大学東京 副学長 建築学）により「東日本大震災と避難所となった学校、その地域社会に対して果たした役割」について話して頂きました。それを受けて、永野和男氏（日本教育工学会会長 聖心女子大学）により、「教育工学研究が社会に果たす役割」と題し会長講演をして頂きました。他に、参加者からのア



イディア・提言を求めるパネルの設置、ワークショップにおける検討がなされました。それらの報告は、前号のニューズレターNo.182に掲載されております。(2) 一般研究発表においては、口頭発表とポスター発表の時間帯を分け、より多くの発表が多くの聴衆に見て頂けるようになりました。さらに、口頭発表の発表時間を少し長くしました。(3) 前大会から取り入れた、課題研究のテーマを公募して設定する方式、前々回からの本文中の文字列検索が可能な CD-ROM 版付きの論文集などは、今大会でも踏襲されました。(4) 震災後の節電対応のため服装はクールビズを推奨しました。それに伴い、スタッフがおそろいの T シャツやポロシャツを着用しました。(5) 国際交流委員会が担当し学会として招聘した中国からの参加者には International Session での発表と懇親会でのご挨拶をいただきました。(6) 本学会として託児室を初めて提供しました。6 家族にご利用頂き大変好評でした。

さて、大会 1 日目は、一般研究発表 1 (口頭発表 9 会場) で始まり、午後には 2 つの並行シンポジウムと一般研究発表 2 (口頭発表 12 会場) と International Session(1) (1 会場) が、夕方からはワークショップ (10 会場) が催されました。各会場とも盛況で、活発な討論が繰り広げられました。初日から 2 日間は、発表会場の建物の入り口ホールにて企業等のご協力により展示会が開催され、詳しい説明を聞くことができました。

大会 2 日目には、午前中に一般研究発表 3 (口頭発表 14 会場およびポスター発表)、International Session(2) (1 会場) が催されました。2 日目、3 日目のポスター発表は、今大会で 5 回目を数え活発な意見交換の場を提供しています。今回は口頭発表の時間と分けたため、会場に入りきれないほど盛況でした。午後の全体会では、特別講演、会長講演に続き、研究奨励賞と論文賞の表彰と受賞者によるプレゼンテーション、中国からの招聘者の紹介、次期全国大会開催校の長崎大学の藤木卓先生に、第 28 回全国大会のご案内 (2012 年 09 月 15 日(土)~17 日(月)) をして頂きました。シンポジウムについては次ページをご覧ください。懇親会はルヴェソン ヴェール (国際交流会館) で開催されました。



大会 3 日目には、午前中に一般研究発表 4 のセッション (口頭発表 12 会場とポスター発表) が、また午後には課題研究発表のセッション (9 会場) が行われました。課題研究の概要は、本ニューズレターの該当ページをご覧ください。

最後に、ご参加いただいた会員の皆様、本大会のプログラム編成を中心とする企画と、シンポジウムや課題研究のコーディネータを務めて下さいました大会企画委員の皆様、企業展示等のまとめ役にあたられた方々、事前・当日・事後の事務処理を担当して下さいました五反田事務局スタッフの皆様への御礼を申し上げます。

#### 大会論文集の購入について(お知らせ)

第 27 回全国大会の大会論文集 (CD-ROM 付) に残部があります。ご購入の方は、下記のいずれかの方法で 7,000 円 (送料 1,000 円を含む) をご送金下さい。入金を確認され次第、お送りいたします。

##### (1) 郵便局備え付けの郵便振替用紙に記入してのご送金

その際、送り先の住所、氏名を明確にお書き下さい。また、連絡のために電子メールアドレスをご記入下さい。郵便振替口座：「00180-2-539055」 加入者名：「日本教育工学会」

##### (2) クレジットカードでのご送金

学会ホームページの会員専用ページの左側にある「入金確認・支払」のボタンをクリックして下さい。パスワードが分からない場合は (office@jset.gr.jp) にご連絡下さい。

以下に、シンポジウム、課題研究のセッションの詳細とワークショップについて報告します (登壇者の敬称等は略します)。

#### シンポジウム 1A: デジタル教科書時代の新たな学びと指導方法

コーディネータ・司会者：豊田充崇 (和歌山大学)、益子典文 (岐阜大学)

登壇者：川上紳一 (岐阜大学)、小柳和喜雄 (奈良教育大学)、本岡 朋 (和歌山市立藤戸台小学校)、柴田好章 (名古屋大学)

ここ数年様々な議論が進められている学校教育におけるデジタル教科書の導入において、教育工学の知見に基づきつつ近未来の具体的な展開を議論する場として本シンポジウムが設定された。教師用・学習者用デジタル教科書に即した実践報告に基づき、教師用デジタル教科書の可能性、学習者用デジタル教科書の可能性、2 つの方向からの議論と提案を試みた。

川上は地域の小・中学校教師との連携システムを構築し 20 万枚以上の静止画からなる理科教材デジタルコンテンツのデータベース構築経験から、(1)興味・関心を高める事象提示、(2)実験・観察結果のばらつきの収束支援、(3)学習内容と日常生活を関係づける事象提示、等の理科授業場面にデジタルコンテンツの開発ニーズがあることを指摘した。それを受け小柳は、川上実践における事例は技術的・内容的・教育的知識相互の交差箇所適合していることを示した上で、教師が「関係に関する知識」を意識する必要性を指摘した。同時に「教科書の電子化」を教授・学習・評価機能以上に幅広く捉えることの重要性を述べ、教師・学習者ともに「自らの表象を磨く道具」として社会文化的な位置づけの明確化が求められることを指摘した。本岡は小学校において学習者用タブレット端末を一人一台導入した授業実践経験に基づき (1)ノートの思考ツール化、(2)「意見表明」の対等化、(3)授業の「協働」活動化、など有効実践事例を報告した。それを受け柴田は、授業において子ども同士の豊かな相互作用を促進するためには「問題の切実性・真正性」「問題の共有可能性」など 5 視点が重要であることを述べ、本岡実践における協働活動展開の可能性を具体的に指摘した。さらにデジタル教科書の実現により、学校に集合して学ぶことの自明性を改めて問い直す必要性を指摘し「持ち帰り型」から「持ち寄り型」の授業への変革を提案した。フロアとの討議では、ハンズオンで協働することと端末上で協働することとの質的違いをどのように捉えるか示すこと、わが国での CAI の学校教育への導入の経緯からツール (CAI) とコンテンツ (CAI コースウェア) を融合した研究推進の重要性など今後の研究推進の方向性が示された。



豊かな学びを促すデジタル教科書には、(1)教師の「関係に関する知識」を刺激・補完するコンテンツを組み込む必要があり、教師自身もそれを意識し磨く必要があること。(2)児童生徒の「協働」を促進するために柴田提案の 5 視点が重要であり、「ツール」と「コンテンツ」の融合を検討する必要があること、が示されたと言える。そして、(3)教科書の機能強化のみならず「自らの表象を磨く」「持ち寄り型の授業」実現など、将来の学校教育を見据えた新たな pedagogy の重要性が確認されたことは、今後のデジタル教科書に関する教育工学研究の方向性に指針を与える成果であると言えるだろう。

### シンポジウム 1B:IR(Institutional Research)とその概念を援用した情報分析

コーディネータ・司会者：永井正洋（首都大学東京）、北澤 武（首都大学東京）

登壇者：柳浦 猛（コロンビア特別区コミュニティーカレッジ）、渡辺雄貴（首都大学東京）、

青山佳代（愛知江南短期大学）、池田輝政（名城大学）、松波紀幸（西東京市立栄小学校）

シンポジウム 1B では、高等教育機関で行われる種々の業務、教育、研究に係るデータを分析・評価すると共にフィードバックし、次段階の取り組みに役立てていく IR(Institutional Research)に着目し、これについて議論する場を設けた。初めに司会の北澤によるパネリスト紹介が行われ、永井から本シンポジウムの趣旨説明が行われた。次に、米国との TV 会議で、柳浦から IR 先進国の米国におけるその概念について、「IR とは（組織としての）大学の理解、戦略、運営の改善につながる研究である」などの報告がなされた。渡辺は、ミドルテネシー州立大学、テネシー工科大学、ヴァンダービルト大学における IR の事例を紹介した。この中で、米国の IR 組織では、ファンディングとパフォーマンスの評価分析を行うという発想があるが、これは我が国の自己点検評価、情報開示などと対応しており、参考になることを主張した。青山は、日本の高等教育機関における IR の機能と課題について、「名古屋大学マネジメント情報」と「名古屋大学評価企画室」の事例を基に報告した。IR の機能として、大学に関する統計情報の提供、大学における計画、自己点検・評価に必要な情報の収集・調査・分析を行い、それらを踏まえた評価作業の支援などを挙げた。また、IR の課題として、データ収集・分析を実施する適切な人材やスキルの育成等を指摘した。池田は、日本の教育制度や教育文化、そして大学経営の革新として機能させる IR とするには、スチュワードシップの考え方を導入することを主張した。具体的には、資産としてのデータ・マネジメントを実践できるスチュワード人材の在り方に焦点を当て、日本におけるその専門職人材のワーク内容と育成可能性を広く論議することが有効であると述べた。松波は、小学校における各種調査データ（体力調査・児童指導要録等）を活用した分析結果を示した。この一例として、体力調査と通学距離の関係を分析した結果、通学距離はいずれの体力調査項目とも相関が見られなかったことから、徒歩通学にあまり拘らなくとも児童の体力保持増進が望める方法があることを示唆し、小・中学校における IR の必要性について主張した。

最後に、フロアからの質問やコメントを受け、全体討論とまとめが行われた。我が国における高等教育の IR は目的ではなく手段として捉え、教育機能改善を目指すことが主張された。また、初等教育における IR の報告を受け、眠っているデータの有効活用やよりフィールドに近い場所での情報分析が求められることが確認された。当シンポジウムを機会に、今後、教育工学の分野においてもまた、IR の議論が発展していくことを願いたい。

## シンポジウム2:グローバルな時代において日本の教育工学は何ができるか

コーディネータ:大島 純(静岡大学),加藤 浩(放送大学),美馬のゆり(公立はこだて未来大学)  
司会者:加藤 浩(放送大学)  
指定討論者:鈴木克明(熊本大学),美馬のゆり(公立はこだて未来大学)  
登壇者:山田政寛(金沢大学),緒方広明(徳島大学,JST さきがけ),青木久美子(放送大学),  
大島 純(静岡大学)

シンポジウム2では、学会員の研究活動から日本教育工学会の国際的な位置づけを振り返り、その上でグローバル化する教育に対して日本教育工学会が今後どのような貢献が可能かを議論することを目的としていた。

最初の登壇者である緒方は、研究の国際貢献度について **academic impact** と **social impact** の2側面から議論を展開した。Thomson Reuters の **Impact Factor** を取り上げ、日本の研究者には今後の大きな貢献が期待されていることを示した。また、**social impact** に関しては、**Open Course Ware (OCW)** など、電子教材の国際的な共有の基盤が確立し、今後様々な技術の提供による社会的貢献が高まっていくことを示した。二人目の山田からは、現在自らが進めている研究の国際的発信について、国際誌への投稿、採録、返戻の経験を具体的に示すとともに、それらの経験から得た若手研究者心得について報告があった。そこでは、同世代の若手研究者への国際貢献への考え方と同時に、若手育成に携わる良き指導研究者の条件が明らかにされた。三人目の青木は、自らの海外での研究・教育の経験から、諸外国の **global literacy** に対する国策について触れた上で、日本の教育工学研究の持つ特異性について、(1)広い文化的背景の中での位置づけを明確に議論しないことによる成果の国際的価値の希薄さと、(2)教育よりも工学に比重が置かれているかのような印象を持たれてしまう傾向を指摘した。四人目の大島は、主に教育実践研究の側面について、これまでの教育工学研究がイノベーションよりも普及を目指したものであったと指摘し、イノベーションを導く研究を国際的な研究者と同じ **field** で議論するための準備について、自らの考えを述べるとともに、現在手がけている研究の紹介を行った。

討論者の鈴木からは、日本教育工学会の国際的貢献に向けた現状の活動と学会員の国際学会での活躍を踏まえて、それをより拡張する方向で更なる展開を考える提案がなされ、美馬は、そのための学会組織としての活動形態の活性化が必須であることと、継続的にこうした議論を展開する機会を維持する重要性を指摘した。また、永野会長より、今後の国際発展のために努力を惜しまないという力強い励ましをいただいた。大会専用 **twitter** では、多くの意見が表明され、そのいくつかについては壇上の議論に反映する試みを行った。今後は、こうしたテクノロジーを利用して、よりインタラクティブなシンポジウムの構成を考えてみる必要があることも示唆された。

## 課題研究1:システム開発・新技術の利用:学びを支援する情報環境のデザイン

コーディネータ・司会者:緒方広明(徳島大学),飛弾信崇(ベネッセコーポレーション)

本課題研究は、教育・学習を支援する新しい情報環境や、それを構成するシステム開発のあり方の提案・開発・実践研究について議論するために企画された。発表件数は4件であった。

葉田(放送大学)は、放送大学で配信されている映像コンテンツを、携帯電話を用いて視聴できるシステムについて報告した。学習支援機能としては、映像コンテンツへの説明文などのテロップ機能、映像と静止画の切り替え機能、バナーによるリンク先へのジャンプ機能があり、それぞれの動作の説明がなされた。平澤(大谷大学)らは、大谷大学博物館における **iPad** を利用した音声ガイドシステムの利用について報告した。このシステムは、展示品の番号を参照して、**iPad** 上の館内マップの番号をタッチすることにより、対応する展示品の音声ガイドを提示する。2年間にわたる利用実践の結果、**iPad** ガイドシステムは、学生に高い評価を得たことが報告された。また、上西(東京工業大学)らは、プログラミング言語教育のためのプレゼンテーションツール **CodEx** について報告した。教師が説明箇所を拡大表示できる機能の提供により、受講者の可読性を高め、理解を促進する機能について説明された。最後に、緒方(徳島大)らは、日常生活での学習の体験をラーニングログとして蓄積し、他の学習者と共有することで、知識やスキルの獲得を支援する、ラーニングログシステム **SCROLL** について報告した。特に、**Android** 端末上で動作するシステムについて詳しく説明された。

4件の発表の後、全体討論では、新しい技術を用いて、システムを開発する際の問題点について、議論がなされた。技術はどんどん進歩していくので、どのような教育・学習が望ましいか、デザインすることから始まり、そのために必要な技術を開発していくことが大事という意見が出された。また、実際に開発したシステムを利用してもらい、実践を重ねていくためには、協力者・理解者を増やし、コミュニティを形成していく必要があるとの意見が出された。一方で技術の変化スピードの加速により、最適な教育環境に関する考え方もドラスティックに変化しているという意見も出された。以上の討議を踏まえ、新しい技術を用いた教育・学習支援システムの研究を行うためには、まず、それによって支援される教育・学習環境のデザインを明確にして、実践を通してコミュニティを形成し、成果を積み上げていく必要があるとの認識に至った。

## 課題研究2: 学習環境・実践コミュニティのデザイン原則

コーディネータ：大島 純（静岡大学）、竹中真希子（大分大学）、舟生日出男（広島大学）

司会者：大島 純（静岡大学）

本課題研究は、個々の事例分析と総括的な分析を同時に行い、デザイン原則を抽象化・系統化することを目指して企画された。Structured Poster Session 形式で、5件の発表が行われた。

まず、冒頭の趣旨説明で、大島（静岡大学）が、デザイン研究では学びのイノベーションをどのように捉えるのかについて述べた上で、デザイン原則には文脈依存のものから一般性の高いものまでレベルに違いがあることなどについて説明した。その後、3件の事例研究の発表が行われた。益川（静岡大学）は、大学院授業実習の質的向上を目指したデザイン改善について、その背景と重視したデザイン原則を説明した後、事後研修会の話し合いプロセスを分析し、効果を検証した結果として、学習者の学習プロセスを可視化・共有して議論するように改善したことによる効果を紹介した。豊増（元総合研究大学院大学）らは、多重課題の中で主業務遂行中における割り込み業務をマネジメントするための新人看護教育に焦点を当て、自らの実践記録の追体験と協調的リフレクションを行う教育デザイン原則を提案するとともに、それに基づいた教育方法を評価した結果について報告した。大島（静岡大学）らは、ジグソー学習法を応用した協調文献読解活動について2年度間のデザイン比較を通じて導入した、レジュメ・テンプレートやエキスパート・グループ、コミュニケーション・ロボットといった要素技術の効果を検討した結果について紹介した。

次に、デザイン研究全般に関わる2件の発表が行われた。安武（広島大学）らは、デザイン研究が、非専門分野から見ると有用なものとなるべきであり、そのためには、1) デザイン研究領域内の語彙ではなく、他の分野の語彙を用いて語ること、2) プロファイルの蓄積だけではなく、操作可能で明確な概念を提示することが必要であると提案した。白水（中京大学）は、デザイン研究の成立の経緯や特徴、成果と限界について説明した。その中で、デザイン研究においては、学習の理論が未だ発展途上であり、プロファイルの積み上げに留まっていることを述べた。そして、学びの複雑性や多様性のために、デザイン研究には常に不安定さがあることや、創造的な実践の開発から効率的な科学的知識の蓄積へと研究の焦点を徐々にシフトすべきであるという主張について説明するとともに、膨大な記録に基づいた子どもの言語獲得に関する事例を紹介し、圧倒的なデータ量に基づいた学習研究の必要性について述べた。

今回の議論から、学習科学の中で構築されたデザイン研究という方法論が、広く教育実践研究に浸透していくための問題点が明らかになり、継続的な検討の必要性が参加者との間に共有された。

## 課題研究3: システムティックな教育・学習支援システム開発における評価の役割

コーディネータ：柏原昭博（電気通信大学）、室田真男（東京工業大学）

司会者：室田真男（東京工業大学）

本課題研究は、第23回大会から継続して設定されているICTを活用した教育・学習システムと評価に関するテーマである。今回は、教育・学習システムをシステムティックに開発するために欠かせないモデルに基づいた評価の検討を目指して企画され、5件の発表がなされた。

まず平嶋（広島大学）は、外化のために用意された部品を利用するKit-Build概念マップにおいて、機能、学習効果、実践利用、タブレット端末という4点からの評価を報告した。これらは学習効果の観点からは弱いですが、現場の先生には十分であり、今後このような評価をどのように育てていくかが重要であるとした。石原（岐阜聖徳学園大学）らは、5年生の算数の授業において、タブレット端末を用いた形成的評価により指導方略を修正することが、どのように学習状況に影響するかを検証し、授業改善に寄与できる可能性を示した。長谷川（北陸先端科学技術大学院大学）らは、研究者と学生からなる研究グループの研究活動プロセスを評価した例を通して、インフォーマルな情報が対象となるこの種の活動においては相対的評価は難しいことを示し、モデルと比較する達成度評価や進捗評価等の可能性を示唆

した。吉川（教育測定研究所）らは、学習過程における知識適用の仕方や、適用条件を見いだすための気づきを測定するために、学習の変化を捉える3つの測定法、キーフレーズ発見法、ペルソナ・コンジョイント法、ネットワーク抽出法の概略を提案した。木幡（慶應義塾大学）らは、都道府県レベルで実施する学力テストにおいて、各校にて行ったテスト結果を効率的に集計・収集する手法と、各校と教育委員会での役割に応じた分析が可能となる手法を提案し実装した学力テスト分析システムを報告した。

後半の全体討論では、タブレット型に代表される情報端末が児童生徒に行き渡った場合の形成的評価やシステム評価の発展性、様々なメディアが出てくることによりメディアと知識の関係はどう変わってきたのか、どう変わるのか、それをどう評価していくのかなどについて、フロアの参加者を交え討論がなされた。最後に、参加されていた池田（教育測定研究所）より、今後の評価法と実践の発展への期待が述べられセッションを終えた。

#### 課題研究4:ICT 活用にとまない発生する問題

コーディネータ・司会者：田中博之（早稲田大学）、長谷川元洋（金城学院大学）

本課題研究は、情報モラル教育やネット依存の問題、著作権、個人情報への取扱いなどの法的な問題、情報セキュリティ、情報公開の観点からのICT活用の問題等、ICT活用にとまない発生する問題やその対策等について幅広く取り上げ、検討することをねらいとして実施された。

前半の研究発表では、まず野村（専修大学）らが、「教育の情報化が教員および生徒に及ぼす影響」と題して、先行研究を幅広くレビューすることによって、児童生徒の眼精疲労や接触性皮膚炎、考える時間の減少といった問題を、教員においては情報機器活用の教育的意義の認識不足、そして教育行政においては情報化の整備状況の格差や研修の不十分さを指摘した。次に鶴田（早稲田大学）らが、「ネット依存の学習におけるR-PDCAサイクルの有効性」と題して、R-PDCAサイクルの特色をふまえ、参加型アクティビティーの実践を基に、ネット依存を主題とした単元内容を構成し計8時間の枠組みで試行した私立K高等学校での授業実践の成果と授業改善の課題について報告した。3つ目の発表として、新目（青山学院大学）らが、「ネット安全教育における参加型学習の効果に関する考察」と題して、各学校の特性に即したネット安全教育を実施する必要性を唱え、東京都内の公立A中学校で実施した参加型授業とアンケート結果から、携帯利用について家で保護者と相談し、共生意識が高い生徒は、携帯利用についての不安が低い傾向にあることなどを明らかにした。最後に、尾崎（札幌市立平岡中学校）らが、「5年間にわたる情報モラル教育の実践から得た成果と課題」と題して、自校での情報モラル教育の変遷と発展過程について、成果と課題を明確にしながら、総合的な学習の時間における問題解決的な学習の困難性、道徳の時間における指導案の効果、そしてPTAとの協働体制のあり方などについて広範に報告した。

後半の全体討論では、保護者への啓発の重要性と困難さ、継続的な学校での実践研究の必要性、異校種間での教員の相互理解と研修の必要性、異校種間でのカリキュラム編成の困難さ、テクノロジーの発展の早さとカリキュラム編成の困難さなどについて、フロアの参加者から参考となる実践事例の紹介もあり、熱心な討論が行われた。

以上の討論から、本課題研究でねらいとした問題の究明とその解決策の実証的な提案について、今後も継続的な研究が必要であることをふまえ、次年度にも、ICT活用における問題について、本学会で課題研究のテーマとして取り上げることの必要性を共通に認識してセッションを終えた。

#### 課題研究5:初等中等教育におけるICT活用コーディネータ

コーディネータ・司会者：稲垣 忠（東北学院大学）、佐藤喜信（内田洋行）、森下耕治（光村図書）

本課題研究では、初等中等教育において取り組まれている新たなICT・サービスを活用した先導的な取組みに関する実証研究、関連する教材コンテンツやハードウェアの開発・評価、情報化の推進を支援する人材・体制についての調査分析等を幅広く議論の対象とすることを目指して企画された。山口（真岡市立真岡中学校）は、技術家庭科の授業でロボット製作を行う際、TwitterとUstreamを使ってロボットコンテストの様子を中継し、他校生徒やロボット製作の専門家と交流した実践が報告された。佐藤（北九州市立大学）は、小学校音楽科での音楽づくりの活動を支援する作曲用のソフトウェアを開発し、授業者へのインタビュー調査の結果、授業案の開発、サブ講師との連携等の課題が示された。小林（神奈川大学附属中高等学校）らは、eラーニングを活用している通信制高校において、教員及び卒業生を対象としたインタビュー調査を実施した。その結果、生徒の学習を継続させるための支援方法として、インフォーマルなコミュニケーション、メールや電話によるモニタリング、保護者を巻き込んだ継続支援が有効であるとした。中尾（内田洋行）らは、デジタルテレビが普通教室に常設された地域の教員を対象に、活用頻度、ICTに対する意識に関する質問紙調査を実施した。その結果、授業のわかりやすさ

や指導効率の向上に有効と感じていること、教員同士の情報交換や ICT 活用の効果を実感することが重要であることを報告している。清水（東京工業大学）らは、教員と保護者の計 7,500 人余りを対象とした電子教科書の活用に関する質問紙調査を実施した。因子分析の結果、7 つの因子が抽出され、校種ごと、学年ごとの傾向の違いについて報告がなされた。

全体討議では、各報告に対する質疑の中で、学校種による ICT の活用度合いに関する差異について議論された。特に高校での活用は十分浸透していないという認識が示されたが、その一方で適切な環境整備と教員研修の実施により、ICT 活用に意欲的になるという意見もあった。環境整備に関しては米国の事例やフューチャースクールにおける ICT 支援員の役割にも議論が及び、人的環境を含めた整備の重要性が指摘された。さらに、ICT 活用自体が目的化しないためには、従来の学習内容の範囲内だけで活用を考えるのではなく、21 世紀スキル等で議論されている多様な力の育成を視野にいれ、ICT を使わないと実現できない学びの価値を明らかにしていくことの重要性が提案された。最後に、教師、児童・生徒が活用する際の問題、ネットワーク環境の安全性、コンテンツの在り方、環境整備の問題の 4 つの視点から課題を整理した。学校の現状の環境整備を踏まえた普及レベルでの研究と、新たなネットワークサービスや児童生徒向け端末等の教育的な意義を模索することの両面から研究を進めていくことの重要性を確認したセッションとなった。

### 課題研究6:教育の質向上に向けた e ポートフォリオ活用

コーディネータ・司会者：小川賀代（日本女子大学）、永田智子（兵庫教育大学）、森本康彦（東京学芸大学）

本課題研究は、e ポートフォリオの持続的活用と普及に向けて、各実践研究で得られた研究知見を共有し、e ポートフォリオの効果を考究するため企画された。

前半の研究発表では、高等教育における e ポートフォリオの開発・実践・評価に関する発表が 6 件行われた。澤崎（仁愛女子短期大学）らは、県内の高等教育機関の連携に e ポートフォリオと LMS, SNS を連携して授業を実践したところ、学生の学びの自主性、振り返りや気づきの促進において効果があったと報告した。年森（鎌倉女子大学）らは、キャリア形成支援に e ポートフォリオを活用することで、キャリア形成支援・就職支援のレベルアップ、学生の自己啓発的なキャリア形成活動の活性化、学生支援側の協働による就職支援などに効果が期待されると報告した。中村（奈良佐保短期大学）は、短期大学において自立支援型ポートフォリオを活用したところ、学生はリフレクションを深め、「やらされる」から「自らする」という姿勢に変化がみられるなどの効果があったことを報告した。小柳（奈良教育大学）は、教職大学院における電子ポートフォリオを最終的な学びの成果に生かすためには、ゴールとなるものの作成・提出と密接に電子ポートフォリオを関連付けていくことが重要であると報告した。谷塚（信州大学）らは、教職 e ポートフォリオの活用により、先輩のものを参考にし、自己の成長の継続的評価、教師の同僚性の育成、相互評価を通じた学生同士が成長などに効果があることを報告した。鹿毛（慶應義塾大学）らは、教職課程におけるポートフォリオの活用により、教職課程履修者の振り返りの支援、学生同士の学習支援、教員の学生理解の支援などに効果があったことなどを報告した。

後半の全体討論では、セッション前に行った「本課題研究に期待すること」のアンケート結果を踏まえ、フロアや発表者から e ポートフォリオに期待する効果・検証された効果について情報の共有がなされた。e ポートフォリオを活用することで、自分の成長を認識し学習意欲が向上する、情報の共有や相互評価により成長するなど学生への効果について意見が出されたほか、教員が楽になる、あるいは同じ労力でも学生の学習成果が向上する、大学のカリキュラム・授業改善など FD に役立つなど大学や教員にも様々な効果があるという意見が出された。また、効果を上げるためにはシステムによる支援や制度・環境の整備、GP 等の機会をうまく利用して効果を実感してもらうことで理解者を増やしていくなどの運用上の工夫が必要であるとの意見が出された。以上の討議を踏まえ、e ポートフォリオの本質的な効果を明らかにするためには、更に実践を通して成果を積み上げていく必要があるとの認識に至った。

### 課題研究7:FD・高等教育

コーディネータ・司会者：黒田 卓（富山大学）、鈴木克明（熊本大学）、椿本弥生（公立はこだて未来大学）

本課題研究は、高等教育や FD の先進的な取り組みや、今後の展開を想定した論理的な枠組みに対して教育工学は何ができるのか、何をすべきかを議論するために企画された。発表件数は 5 件であった。

中山（東京工業大学）は、工学系分野の大学教育と学生の就職との関連について報告した。大学教育の効用は遅効性であり、就職後にキャリアを積むことによって大学教育を評価できる一方で、カリキュラムと産業ニーズ間にミスマッチが存在していることを指摘し、大学卒業者の職業生活を中心とする

キャリア形成の評価が必要であると説明した。金西（徳島大学）らは、学習者を巻き込んだ授業改善の実践と評価について報告した。単に授業評価アンケートを実施するのではなく、学習者が自分が受けている授業を批判的に捉えなおし、授業を構成するのは自分自身であるという意識を持てるか否かが授業を変えるのではないかと問いかけた。また、美馬（公立はこだて未来大学）は、日常の教育活動におけるFDのための仕組みづくりについて報告した。米国における学習支援組織の系譜を紹介し、教員自身が学習環境デザイナーとして学習プログラムの開発に深く関与することがFDとなることを主張した。生田（新潟大学）らは、新潟大学学士力アセスメントシステム（NBAS）の開発と、人材育成の観点からの到達目標達成型の教育プログラムの評価について報告した。評価では、各専攻の目標領域の相対的比重が明らかになったことが示された。最後に武田（関西学院大学）は、SNSの利用やインフォーマルな学びなど、近年の高等教育をめぐる変化をふまえたAcademic Analyticsの枠組みを提案した。教員個別の研究推進や分析はもちろん重要であるが、大学全体としてもそれらを推進する必要性を提言した。発表後の全体討論では、AcademicとEmployabilityを分けるべきか否かで議論した。学術的な学びを就職力につなげるために、これらの概念を整理すべきだとの指摘があった。一方、研究者養成大学と就職予備校大学を区別してもよいのではないかという意見もあった。これについて、社会に出てからも必要なスキルを習得するという点は大学に共通しているため、Problem based learningをもっと推進すべきだという発言もあった。従来の大学における目標達成評価の軸ではEmployabilityはカリキュラムに入っていないという問題点から、教育工学研究でカリキュラムを通した評価軸を作成する必要性が指摘された。さらに、Employabilityの意味をより広く捉え、Learning how to learnのメタ学習スキルとする意見も示された。以上の討議を踏まえ、メタスキルを全ての科目で教員も学生も意識していくことが重要であり、さらにそれを学習や評価の全体的地図に位置づけていく必要があるとの認識に至った。

#### 課題研究8: 教育工学の教師教育への貢献

コーディネータ・司会者：柴田好章（名古屋大学）、後藤康志（新潟大学）

本課題研究では、教育工学の教師教育への貢献のテーマのもとで、5つの研究発表が行われた。木原（大阪教育大学）は過去10年間の『日本教育工学会論文誌』掲載論文を分析し、新しい教育課題に応えるための取り組みという特徴があること、「反省的実践家」概念の継承や発展が目指されていること、教員養成・再教育カリキュラムに関する研究が乏しいことなど、教師教育研究における教育工学的アプローチの特徴と課題を明らかにした。坂本（愛知工業大学）は、非教員養成系大学の教職課程において、自らの授業を客観的に分析し評価・改善しようとする教師を養成することをねらいとし、その具現化としての授業分析支援ツールの事例の紹介があった。澤本（日本女子大学）はリフレクティブなアプローチが教師の成長のための授業研究において成果を納めてきた一方、クリアすべき課題も残されており、これを乗り越えるための反省的教材研究の開発が、教育工学的アプローチの国語科教育における授業研究及び教材研究に対する貢献の事例となり得ることを指摘している。高橋（新潟県村上南小学校）は、リフレクティブなアプローチを個人のレベルではなく同僚教師まで拡大し、問題確定段階、問題改善段階、分析・評価段階において校内体制でアクションリサーチを成立させる条件を検討している。高橋（新潟県塩殿小学校）は校内研修にアクションリサーチを位置づけ、組織的に取り組む事例を紹介し、問題の確定と共有、改善策・基準の確定、授業実施・データ収集、分析・評価、公開というステップを踏むことを通して、校内研修の組織的な枠組の中で個々の教師の問題が整理され改善された事例が示された。

全体討論では、教師教育に関わる喫緊の課題に対して教育工学会としていかに対応するか議論がなされた。現場の教員が教育工学に出会うことで何が変わられるのか、大学研究者と現場との実践コミュニティをいかにつくるかといった課題が指摘された。教育工学の歴史を見ると、その原点は「教育現場の問題を解決する」点にあり、そのための授業改善の働きかけやツール開発が授業を変え、教師を変えてきたともいえることから、今こそ校内研究や教師教育の何が問題なのかを明らかにし、提案していくことが必要である、との指摘があった。新しい教員養成カリキュラムの提案、継続的な教師の成長を促す学習環境の開発、持続可能なアクションリサーチの仕組み作りなど、様々なレベルでの教育工学の教師教育への貢献が今後、検討されるべきであることが確認された。

#### 課題研究9 ゲーム・シミュレーションを利用した教育・学習支援

コーディネータ：山田政寛（金沢大学）

司会者：藤本 徹（東京大学）、林 敏浩（香川大学）

本課題研究はゲームの教育・学習利用について、2年前の東京大学における大会で実施したセッションより発展させることを目的に開催されたものである。

本セッションでは4件の発表がなされた。藤本（東京大学）はこれまでの教育ゲーム、ゲームの教育・学習利用について先行研究を整理し、その歴史と知見をレビューした。適切な統制群を用いた実証研究は少ないため、従来の手法と対比して有効性を把握しにくい、通常の教授方法よりも費用をかけて、その費用に見合うだけの教育効果があるのか疑問を解消できる結果を示す研究が十分に行われていない等の6つの問題点を挙げた。池尻（東京大学）は歴史学習を通じて、歴史的思考を身につけさせる重要性を論じた上で、歴史的思考を現在の政策や生活に適用することを学ぶことを主眼にしたカードゲームを開発した。高校の歴史の授業において実施した実践授業の結果を分析して、その効果について報告した。発言内容で分析したところ、現在の政策の改善点に積極的な発言が生まれるなど、歴史的思考が現在の状況に置ける思考へ転移したことを示し、その有効性を論じた。福山（早稲田大学）は環境学習における社会的ジレンマを活用したカードゲームの効果について、ゲームの試行後調査、追跡評価を行った結果を報告した。ゲーム試行から環境配慮得点が維持している群の特徴として、事後調査時に個人施策について挙げていることが示された。松田（東京工業大学）はゲームとゲーミングの概念の違いに触れながら、松田の過去の研究を整理し、教育のためのゲーム設計について配慮すべき点として、目標設定、リアリティ、振り返り支援、対話インタフェースの充実など、7点を挙げた。

後半の議論では、ゲームに対する誤解、教育向けのデザイン、評価の観点等について議論が活発に行われた。ゲームに対して、日本では娯楽性が優先されるものという認識が強いが、それは誤った認識であることなどの指摘があり、ゲームに対する誤解を解いていく必要性が議論された。教育向けのデザインとしては、ゲームとして楽しさという観点にどう配慮すべきかという点についてフロアから質問があり、没入できるデザイン、動きなどを含めたデザイン、対象者の分析といったインストラクショナルデザインの観点も今後配慮すべきではないかという議論がなされる一方で、そもそも「楽しさ」というものは配慮する必要がないという意見も出された。評価については、藤本が挙げた「従来の教授法に比べて、ゲーム・ゲーミングというものが有効であるということがあまり示されていない」という点に関係するが、この点については対照群として何をさせるのが課題であることが挙げられ、今後も継続的に議論していくこととなった。

## ワークショップ

ワークショップは、第25回全国大会から開催されている、主催者が設定した教育工学に関連するテーマについてインフォーマルに語りあう場である。ワークショップでは、実践は進んでいるものの研究として認識されていない問題や、新しい情報技術の教育利用などの萌芽的な研究について、口頭・ポスター発表とは一味違う雰囲気で行う。

今年度の全国大会においては、初日の研究発表終了後の1時間30分が割り当てられた。今回は応募件数が多く、大会企画委員会で審査を行った結果、10件のワークショップが実施された。具体的には、デザイン研究の方法論、項目反応理論による分析手法、教育実践研究論文査読シミュレーションなどの研究方法に関するものや、実社会との協働による学習や、ゲーム理論を用いた学習ソフト開発、映像編集などを用いた学習に関するもの、さらに、プレFDなどの大学院生の学びに関するものや若手研究者の役割など、教育工学に関連する魅力的かつ多種多様な話題が話しあわれた。さらに今年度は、震災等の危機的状況への対応も議論の対象となった。どの会場も、主催者の企画や運営の工夫と参加者の熱意によって大変盛況であった。1会場あたり15名から50名以上の参加があり、合計では310名以上がワークショップに参加した。なお、ワークショップでは大会参加者以外の参加を認めており、3つの企画で合計20名以上のワークショップのみの参加者を迎えることができた。したがってワークショップは、会員をはじめとする大会参加者相互の深い交流の場であるのみならず、幅広い交流の場でもあった。また、ワークショップへの参加を目的に来場し、当日受付で大会参加の登録をしてくださった方々もいた。このように学会の裾野を広げるためにも、全国大会でのワークショップ実施は有効と言える。

以上、第27回全国大会について報告いたしました。次回の大会に向けて、内容・運営等に関するご意見等は、大会企画委員会（[taikai2012@jset.gr.jp](mailto:taikai2012@jset.gr.jp)）までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

## 2011年度 冬の合宿研究会のご案内（第三報）

### ■ テーマ：国際学会での発表スキルを磨く ―伝わる英語発表―

今回のテーマは国際学会における英語発表のスキルです。英語で論文は書けても、口頭発表となると苦手意識を持っている教育工学研究者は多いようです。国際会議・学会における発表がスムーズに進むかどうかは、単に語学力の問題ではなく、プレゼンテーション自体の進め方や代表的な質問への準備などにもかかっています。本合宿研究会では、論文を元に組み立てる発表の構成、外国の研究者に理解してもらいやすいスライド作成、質疑応答で発表の趣旨を理解してもらう方法などについて、英語プレゼンテーション指導の分野で著名な講師を招き、単なるノウハウでなく、プレゼンテーションの理論や英語発表の基本的な考え方から学びます。特に、初めて国際学会で発表しようとしている大学院生や、発表のたびに用意した原稿を読んでもしまふことに終始してしまったり、ぶっつけ本番の質疑応答で苦労したりしている研究者の参加を歓迎します。

■ 期日： 2012年02月18日（土）13:30～19日（日）12:00

■ 会場： 大学コンソーシアムやまがた ゆうキャンパス・ステーション  
（山形市香澄町1-3-15 山形むらさきさわビル1階）

<http://unicon.kj.yamagata-u.ac.jp/modules/pico/index.php/content0288.html>

・JRでお越しの場合：JR山形駅東口から徒歩2分

・航空機をご利用の場合：山形空港から山形空港ライナーで山形駅まで約30分

・仙台方面から：仙台駅前から高速バスで約1時間、山交ビル前下車徒歩3分

■ 主な対象： 国際学会における発表をより効果的に行おうとしている研究者・大学院生・学生・教員など（発表経験がない方も参加できます）

■ 定員： 30名

■ 講師： 山本涼一 帝京科学大学 総合教育センター長 教授  
私立大学情報教育協会 英語学教育FD/ICT活用研究委員会 委員長

■ お申し込み方法：

下記ウェブサイトからお申し込み下さい。合宿研究会の趣旨を踏まえて、宿泊をご希望にならない方は、欠員が発生した場合のみ参加していただきます（特別な事情がある方はご相談下さい）。

申し込みサイト <https://reas2.code.ouj.ac.jp/cgi-bin/WebObjects/REAS?t=18331>

■ 参加費： 12,000円（1泊2食付き）

宿泊予定ホテル：コンフォートホテル山形（会場に隣接）、懇親会：ホテルメトロポリタン山形

■ プログラム

【1日目】 02月18日（土）13:50～18:40（受付13:00～13:30 受付直後にチェックインしていただきます）

13:50～14:00	挨拶・趣旨説明・グループ分け
14:00～14:50	（ユニット1）講義：国際学会へのエントリー，演習：英文での書き出し，相互批評
15:00～16:00	（ユニット2）講義：プレゼンテーションの基本，演習：質疑応答による概要理解
16:10～17:40	（ユニット3）講義：シナリオの作成，演習：論文の再構成
17:40～18:40	課題：論文を英語で書き直し
19:00～21:00	情報交換会

【2日目】 02月19日（日）09:00～12:00

09:00～09:30	スピーチクリニック
09:30～10:00	話す英文原稿の作成・リハーサル
10:00～12:00	発表と相互批評・講師からのコメント

■ 開催担当・問い合わせ先： 松田岳士（島根大学） eメール [mat@hirc.aoyama.ac.jp](mailto:mat@hirc.aoyama.ac.jp)

## 大学教員のためのFD研修会（ワークショップ）のご案内

趣旨：この研修会は、本日本教育工学会がこれまでの知見を活用し、大学教育の授業改善や教員の授業力向上へ寄与しようと、2009年度から実施されているものです。大学教員をはじめ、大学教員を目指す学生や学校現場教員、指導主事等を対象としています。本研修会の修了生には学会より認定書を発行し、本研修を受講したことを証明します。

企画：日本教育工学会FD特別委員会（委員長：村川雅弘）

テーマ：「大学授業デザインの方法－1 コマの授業からシラバスまで－」

日時：平成24年02月20日（月）10時～17時30分

会場：関西大学東京センター（JR東京駅日本橋口改札すぐ「サピアタワー」9階）

定員：30名（申し込み着順で、定員になり次第、締め切ります）

講師：鈴木克明（熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻 専攻長）

参加費：2,000円（学会員）、3,000円（学会員以外）

認定書：研修会終了後に最終レポートを提出した修了生には、日本教育工学会から認定書が授与されます。

世話人：山田政寛（金沢大学）・渡辺雄貴（首都大学東京）・岩崎千晶（関西大学）

申込み：[http://labs.m-mode.net/jset\\_fd/](http://labs.m-mode.net/jset_fd/)にアクセスしてお申し込み下さい。

平成24年01月31日（火）まで受け付けますが、定員に達した時点で受付を終了いたします。

◆【お問い合わせ先】 山田政寛（金沢大学） E-mail：mark@mark-lab.net

○ スケジュール（予定）：変更があるかもしれませんので、日本教育工学会ウェブページ（<http://www.jset.gr.jp/index.html>）で確認して下さい。

- |             |   |
|-------------|---|
| 10:00-10:10 | 開講、講師・スタッフ紹介、趣旨説明                           |
| 10:10-11:00 | ワークショップⅠ「授業のデザインに関する問題意識の明確化」               |
| 11:10-12:00 | ワークショップⅡ「授業のデザインに関する情報・課題の共有」               |
| 13:00-14:00 | セッション1 「何を誰に教えようとしているのか」<br>ワークショップⅢ 「振り返り」 |
| 14:10-15:10 | セッション2 「どんな方法で教えるのか」<br>ワークショップⅣ 「振り返り」     |
| 15:20-16:20 | セッション3 「良い点・悪い点は何か」<br>ワークショップⅤ 「振り返り」      |
| 16:30-17:00 | ワークショップⅥ「授業改善プランの共有」                        |
| 17:00-17:30 | ワークショップⅥの報告と協議、講師からの助言                      |
| 17:30-17:35 | レポート提出についての確認、閉講                            |

○ 準備物：高等教育機関において授業実践を行っている参加者は、自分の授業のシラバス、授業資料（スライド、プリント、板書ノートなど）など、授業に関する資料を6部持参して下さい。学生等で未だ高等教育機関において授業実践を行っていない、もしくは今後実施する予定の参加者は、実施することを想定した授業デザインに関する資料を6部持参して下さい。

○ 情報交換会：セミナー終了後、2時間程度の情報交換会を予定しております。参加者のみなさま同士や登壇者との有意義な情報交換やFDセミナーへのご意見・ご要望などをお聞かせいただく場としてご活用いただければと考えております。

◇なお、02月18日（土）・19日（日）は山形で冬合宿があります。このセミナーの日程は合宿に続けて設定しています。遠方の方は、合わせて参加されるとお得で便利です。

## 研究会の開催



研究会 2011

テーマ 地域連携と教育・学習環境／一般

- 日 時：2011年12月17日（土）
- 会 場：香川大学 林町キャンパス（講義棟3階）  
（〒761-0396 香川県高松市林町 2217-20）
- 担 当：林 敏浩（hayashi@eng.kagawa-u.ac.jp）

## ●プログラム

発表時間：発表1件につき24分（発表19分，質疑5分）

A会場(3303教室)，B会場(3304教室)

## 10:25-10:30 諸連絡

## 10:30-12:10 午前の部

- A1) 教師の情報モラル指導力向上のための要因  
玉田和恵（江戸川大学），松田稔樹（東京工業大学大学院）
- A2) eラーニング主体の大学に入学する社会人の潜在的動機に関する分析  
関 和子（早稲田大学大学院），向後千春（早稲田大学）
- A3) eラーニングで学ぶ社会人学生のスタディスキル科目受講前後における学生生活に対する自信の変化  
石川奈保子（早稲田大学大学院），向後千春（早稲田大学）
- A4) ICTを活用したアクティブラーニングの支援体制の米国事例報告  
林 一雅（東京大学）

- B1) 学びを省察する「発見ノート」が教員志望学生の学びの省察に及ぼす影響  
沖林洋平，田中理絵，鷹岡 亮，岡村吉永（山口大学）
- B2) 大学教科書マンガにおける女性登場人物に対する好感度に関する調査  
周村諭里，柳沢昌義（東洋英和女学院大学／教育テスト研究センター）
- B3) 授業における学生の協働作業がもたらす教育効果  
西 誠（金沢工業大学）
- B4) 教員が送信した電子メールに学生が返信するまでの時間に関する分析  
立野貴之（松蔭大学），加藤由樹（相模女子大学），加藤尚吾（東京女子大学）

## 13:05-13:10 委員会挨拶・諸連絡

## 13:10-15:15 午後の部第一部

- A5) 「情報が日常生活や社会に与える影響を考えさせる学習活動」のための授業パッケージを活用した教員研修プログラムの評価  
高橋伸明（岡山県笠岡市教育委員会），吉野和美（富士市立田子浦小学校），  
影山知美（津山市立弥生小学校），笠原晶子（前橋市立荒牧小学校），  
松橋尚子（大田区立洗足池小学校），宮脇康一（荒川区立大門小学校），  
渡辺純恵（富山市立東部小学校），此川美奈代（滑川市立西部小学校），  
天野三鶴（松戸市立中部小学校），堀田龍也（玉川大学教職大学院）
- A6) 子どもの携帯電話やインターネットの利用に対する保護者の不安に関する検討  
清水康敬（東京工業大学），小泉力一（尚美学園大学），山本朋弘（熊本県教育庁），  
横山隆光（岐阜県池田中学校）
- A7) 大学間連携で取り組むFD活動～階層別研修：新任教員合同研修を例に～  
川面きよ（公益財団法人大学コンソーシアム京都）
- A8) 関西光科学研究所及びきつづ光科学館ふおとんにおける地域連携を目指したエネルギー環境教育活動の取り組み  
星屋泰二，小島公人（日本原子力研究開発機構）
- A9) 図書館による文献情報リテラシー授業の学生授業評価  
庄ゆかり（広島大学図書館／広島大学大学院），日野美穂（広島大学図書館）

- B5) 動的顔色と表情による情動提示の合成的解析のための平均顔色画像アバタシステムの開発  
山田貴志 (香川大学), 渡辺富夫 (岡山県立大学)
- B6) 授業研究のためのティーチング・ポートフォリオの形式的記述手法  
畑中佑介, 森本康彦, 宮寺庸造 (東京学芸大学)
- B7) 根拠に基づく自己評価を促す教職履修カルテシステムの実装と運用  
松田稔樹 (東京工業大学大学院)
- B8) 「図形と計量」の課題学習を支援する教授活動ゲーム用対話インタフェース  
染谷 諒, 松田稔樹 (東京工業大学大学院)
- B9) 新聞投稿文の作成を支援するシステムの試作  
生田和重 (徳島文理大学)

### 15:30-17:10 午後の部第二部

- A10) 大学生の著作権に関する知識・意識・行動の調査項目の開発  
山本 光 (横浜国立大学), 中尾教子 (内田洋行教育総合研究所),  
額田順二, 野中陽一 (横浜国立大学)
- A11) 技術者モラル教育で必要な状況知識としての「会社」理解を促す働きかけ  
遠藤信一 (東京工業大学附属科学技術高等学校), 松田稔樹 (東京工業大学大学院)
- A12) 入学前教育から開始するキャリア教育の評価の試み  
小椋理子 (ソニー学園湘北短期大学), 石井卓也 (早稲田大学),  
岩崎敏之, 飯塚順一 (ソニー学園湘北短期大学)
- A13) ワークルールに焦点をあてたキャリア教育に関する実践  
福本 徹 (国立教育政策研究所)
- 
- B10) 巨大壁面電子黒板と携帯電話を連携する大学講義用インタラクティブソフトウェア開発  
柳沢昌義 (東洋英和女学院大学)
- B11) 電子黒板・プロジェクタのインタフェースの違いが受講者の主観的評価に及ぼす影響  
佐藤弘毅 (名古屋大学)
- B12) 実物投影機とコンピュータの活用における教員間コミュニケーションに関する事例研究  
中尾教子 (総合研究大学院大学/内田洋行教育総合研究所),  
三輪眞木子, 青木久美子 (総合研究大学院大学/放送大学), 堀田龍也 (玉川大学教職大学院)
- B13) 普通教室における大型提示装置の適正な配置と見やすさに関する検討  
山田智之 (内田洋行教育総合研究所), 野中陽一 (横浜国立大学),  
青木栄太 (内田洋行教育総合研究所), 高橋 純 (富山大学), 堀田龍也 (玉川大学教職大学院)

- 発表時間：当研究会は会員・非会員による討論の場を作ることを目的として開催してきました。討論時間を確保するために、持ち時間 24 分において質疑応答の時間を 5 分以上は確保していただいております。よろしくご理解願います。
- 参加費用：参加費は無料です。研究会報告集の年間予約購読代金 (3,500 円) を支払済みの本学会会員以外の方は、報告集代として 1,000 円を当日受付にてお支払い下さい。また、当日受付にて年間予約購読の申込みも可能です。尚、年会費には研究会報告集の年間購読代金は含まれておりません。
- 交通案内：公共交通機関をご利用下さい。JR 高松駅バスターミナルなどから、ことでんバスをご利用下さい。「工学部前」で下車下さい (JR 高松駅バスターミナルから約 30 分)。また、ことでん琴平線もご利用できます。詳しくは、香川大学林町キャンパスの「アクセス案内」をご参照下さい [http://www.kagawa-u.ac.jp/kagawa-u\_eng/hayashi/access/]。
- 昼食案内：大学周辺に飲食店 (うどん屋さん) やコンビニエンスストアがあります。
- 情報交換会のご案内：研究会終了後、高松市内にて情報交換会を開催予定です。詳細につきましては研究会 Web ページをご覧ください。

### 研究会の発表募集

テーマ： 情報モラル教育の実践／一般

- 日 時：2012 年 03 月 03 日 (土)
- 会 場：山口大学 (担当：阿濱茂樹)
- 申込締切：2012 年 01 月 08 日 (日)
- 原稿提出：2012 年 01 月 29 日 (日)

●募集内容：

新学習指導要領にも情報モラル教育に関する内容が多く盛り込まれています。それに関連して、多くの情報モラル教育の実践が行われていますが、体系化と標準化の課題が残っていると考えられます。加えて、ネットいじめなど、児童・生徒の情報通信機器を利用したトラブルも社会問題化し、解決に向けて真剣に議論を進めなければならない時期にきています。

そこで、本研究会では、情報モラル教育に関わる教育実践やその展望をテーマに研究成果の発表を募らせていただきます。

また、上記のテーマにはこだわらない教育工学一般における研究成果の発表も幅広く募集いたします。

●申込方法：研究会 Web ページよりお申し込み下さい。

●原稿執筆：締切後 1 週間以内に、申込時に登録されたアドレスに発表の採択結果と執筆要項を電子メールにて送付いたします。

●原稿提出：原稿の提出は PDF 形式で、研究会 Web ページの「発表申込フォーム」より、発表申込時に発行された「受付キー」を使用してご登録下さい。

尚、期限までに提出いただけない場合は、発表取消となりますのでご注意ください。

2012 年度の研究会のご案内

2012 年		会場	申込締切	原稿提出締切
05 月 19 (土)	教育実践の研究とその成果／一般	秋田大	03 月 18 (日)	04 月 08 (日)
07 月 07 (土)	ICT を活用した FD／一般	京都大	05 月 06 (日)	05 月 27 (日)
10 月 27 (土)	(テーマ調整中)／一般	岡山大	08 月 26 (日)	09 月 23 (日)
12 月 15 (土)	(テーマ調整中)／一般	東京学芸大	10 月 14 (日)	11 月 04 日(日)
2013 年				
03 月 02 (土)	(テーマ調整中)／一般	三重大	01 月 06 (日)	01 月 27 (日)

年間予約購読のお勧め

●年間購読：研究会報告集の年間予約購読価格は郵送料込みで 3,500 円です（当日売りは 1 冊 1,000 円と割高になります）。研究会の受付でも年間購読を受け付けております。

研究会の開催報告

●日 時：2011 年 10 月 27 日

●会 場：島根大学教育学部（松江キャンパス）

●発表件数：32 件

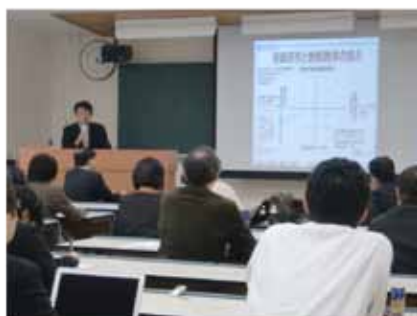
●参加者数：60 名（内非会員 12 名）

「変動社会における教員養成と教師教育／一般」というテーマで研究会を開催致しました。発表は 32 件、参加者は 60 名でした。会場では、教員養成、現職教育、大学における教育実践など多岐にわたる研究発表がなされました。新旧の研究会委員での議論を踏まえて、今回の研究会から研究会の質的向上を図るべく、質問のあり方についてそれぞれの会場で発表前に確認しました。その成果もあって、質疑応答でも活発な議論が行われました。

また、今回の研究会では、研究会テーマに沿ったセミナーを開催致しました。奈良教育大学 小柳和喜雄先生を講師としてお迎えし、「変動社会における教師教育を考える」をテーマに、日本・米国などにおける教師教育やスタンダードの動向、教員養成における質保証などについて話題提供して頂きました。小柳先生の講演・日頃の活動を踏まえて、教師教育に関する疑問・質問を 3-4 名グループでまとめて頂き、小柳先生と深見がそれらについて回答いたしました。大学教員の力量形成や日本教育工学会における教師教育に関する研究の方向性などについて幅広い議論がなされました。

本研究会を通じて、皆様の今後のご研究が発展し、多くの研究成果が生まれることを期待しています。ご参加頂きました皆様に御礼申し上げます。

担当：深見俊崇（島根大学）



---

## 日本教育工学会論文誌 特集号 論文募集

### 「特集：大学教育の改善・FD」のご案内（最終報）

---

2008年から大学においてFD（Faculty Development）が義務化を背景として、大学における教育・授業改善の取り組みがクローズアップされるようになってきています。ただ、大学教育やFDに関する研究についてはまだまだ蓄積が少ないのが現状であり、今後、大学教育の改善やFDにおける教育工学の役割がより重要になってくると考えられます。

そこで、本論文特集号では、大学教育の改善やFDに関する研究論文を募集します。また、各大学で実施されている教育改善の実践を教育実践研究論文として投稿されることを期待しております。

本特集号が発行されることによって、大学教育改善・FDに関する教育工学研究の知見がまとめられ、今後の研究と大学教育の高度化に有用になることを目指します。

#### 1. 対象分野

- (1) 大学における授業の改善
- (2) 新しい学習観にもとづく大学授業のデザイン・実践・評価
- (3) FDのための具体的な実践（公開授業、教員研修など）のデザイン・実践・評価
- (4) 学生（TA・SA）を活用した授業改善
- (5) 大学におけるカリキュラムデザイン
- (6) ICTを活用したFD
- (7) 組織的なFDのデザイン・効果
- (8) 大学間ネットワークの役割・効果
- (9) 学問分野別の教育の質保証に関する取り組み
- (10) その他の「大学教育の改善・FD」に関する理論・手法・システム開発・実践研究など

#### 2. 募集論文の種類

通常の論文誌と同様に、「論文」「システム開発論文」「教育実践研究論文」「資料」「寄書」を募集します。それぞれの論文種別については、投稿規定をご覧ください。論文の査読は、通常の論文誌の場合と同じです。ただし、査読は2回限りとし、編集委員会が示した掲載の条件を修正原稿で満たさない場合は採録になりません。「ショートレター」として既に掲載されている内容を発展させて「論文」として投稿することも可能ですが、単に分量を増やして詳細に説明しただけでは発展させたことになりませんので、ご注意ください。なお、本特集号の対象分野外の論文が投稿された場合は、一般論文として扱うこととなりますので、あらかじめご了承ください。

なお、特集号編集委員会では、本特集号のテーマの特徴から、大学における教育改善・FDに関する実践を「教育実践研究論文」、あるいは「資料」の条件を満たすようにまとめ、積極的に投稿していただくことを期待しています。

#### 3. 論文投稿締め切り日（2012年11月発行予定）

投稿原稿を02月08日までに電子投稿をお願いします。ただし、02月15日までは、論文を改訂することができます。締め切りの延長は行わない方針です。

投稿原稿提出締め切り（電子投稿）：2012年02月08日（水）

最終原稿提出締め切り（電子投稿）：2012年02月15日（水）

#### 4. 論文投稿の仕方

原稿は、「原稿執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html>)に従って執筆し、学会ホームページの会員専用Webサイトから電子投稿して下さい。郵送による投稿は受け付けないことになりました。

#### 5. 問い合わせ先

日本教育工学会事務局      電子メール：tokushu2012@jset.gr.jp,      Tel/Fax：03-5740-9505

## 6. 特集号編集委員会

吉崎静夫（日本女子大学）一編集長  
鈴木克明（熊本大学）一副編集長  
村上正行（京都外国語大学）一副編集長  
益子典文（岐阜大学）一編集幹事  
山田政寛（金沢大学）一編集幹事  
赤倉貴子（東京理科大学）  
小柳和喜雄（奈良教育大学）  
加藤 浩（放送大学）  
木原俊行（大阪教育大学）  
黒上晴夫（関西大学）  
澤本和子（日本女子大学）  
鈴木真理子（滋賀大学）  
田口真奈（京都大学）  
西森年寿（大阪大学）  
堀田龍也（玉川大学）  
美馬のゆり（公立はこだて未来大学）  
村川雅弘（鳴門教育大学）  
山内祐平（東京大学）

---

## 日本教育工学会論文誌 ショートレター増刊号論文募集のご案内（第二報）

日本教育工学会論文誌 vol. 36, Suppl. の発行

論文受付締切：2012年04月01日（日）編集委員会事務局必着

---

日本教育工学会論文誌 Vol.36,Suppl.は、年1回発行されるショートレターの増刊号です。投稿規定及び原稿執筆の手引きを参照の上、奮ってご投稿下さい。ショートレターの採録条件は、Vol.27より以下のようにになりましたのでご注意ください（詳細は、JET117号参照）。

1. ショートレターは、刷り上がり **4ページ厳守**です。（4ページを超えるものは採録しない）
2. ショートレターでは、筆頭著者（ファースト・オーサー）は**本学会会員であることが条件**です。あるいは、筆頭著者が投稿時に入会手続きおよび会費納入等を行うことが必要です。なお、各会員は本ショートレターを**年1編に限り投稿**できます。
3. **2012年12月に発刊の予定**です。

ショートレターの内容については、例えば以下のような内容が考えられます。

- ・全国大会や研究会で発表した内容をまとめたもの
- ・教育実践をベースにした実践と知見をまとめたもの
- ・教育システム開発、教育実践研究など
- ・教育工学研究としての速報的な内容
- ・卒業論文や修士論文等としてまとめた内容、など

なお、ショートレターで掲載された内容を、研究的に発展させまとめて、論文採録の条件を満たすと思われる内容は、学会論文誌に投稿することができます。

ページ数が限られていることから、タイトル、著者、内容については十分厳選の上、ご投稿下さい。

特に、ショートレターの趣旨から、多人数の連名著者はさけて下さい。研究全体がプロジェクトチームによる共同研究であっても、実際にショートレターの限られた内容に直接携わり、執筆した研究者にしてくださいようお願い致します。

### ショートレターの査読日程予定(2012年度)：

- 04月 担当及び査読者の指名
- 05月 編集委員会で査読進捗状況の確認
- 07月 編集委員会で採録、返戻の第1回決定
- 09月 編集委員会で採録、返戻の第2回決定

10月 最終原稿の提出  
11月 著者校正  
12月 増刊号発行予定

**論文投稿の仕方：**

原稿は、「執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html>)に従って執筆し、学会ホームページの会員専用 Web サイトより電子投稿して下さい。投稿論文は電子投稿のみ受け付けています。

問い合わせ先：日本教育工学会事務局

電子メール：short@jset.gr.jp    Tel/Fax：03-5740-9505

---

## 研究奨励賞の推薦依頼（最終報）

---

### 研究奨励賞候補者をご推薦下さい

第27回全国大会（首都大学東京）の研究発表者の中から、研究奨励賞の候補者を下記の要領でご推薦下さい。発表をお聞きになっていない場合でも、論文集を参考にご推薦頂くことができます。

また、理事・評議員・大会役員・座長担当者の方は率先してご推薦下さいますようお願い申し上げます。

**★推薦締め切りは12月31日（土）**となっておりますので、お早めにご推薦下さい。

..... キリトリ線 .....

選考の基準

1. 選考対象者は、本学会の会員であって、受賞時に40歳を越えていないこと。  
ただし、本学会入会時から5年を経過していない場合は考慮する。
2. 選考時点から遡って最後の年次大会での正式の研究発表登壇者であること。
3. 既に研究奨励賞を受賞している者でないこと。
4. 対象者の過去の研究業績を尊重すること。

注：研究奨励賞（1985年10月31日 理事会申し合わせ）

「研究奨励賞は、教育工学および関連領域に関する学問の奨励のため、有為と認められる新進の研究者に贈呈する。この奨励賞を受ける者は、本学会会員であり且つ研究大会において講演を行った中から、優秀な論文を発表した者から選定する。」

..... キリトリ線 .....

## 第27回 研究奨励賞候補者推薦用紙

候補者氏名	講演番号	推薦者

---

---

## 新入会員

(2011年09月06日～2011年11月13日) 10名 (正会員：6名, 学生会員：3名, 准会員：1名)

---

### ■正会員 6名

庄内慶一 (拓殖大学北海道短期大学)

近藤 尚 (中部大学)

中村郷子 (新潟医療福祉大学)

山口晴久 (九州産業大学)

高橋博美 (神戸学院大学)

金澤 寛 (広島文化学園大学)

### ■学生会員 3名

金沢 緑 (広島大学大学院)

平川成一 (関西大学大学院)

坂東貴夫 (名古屋大学)

### ■准会員 1名

藤池安代 (神戸市教育委員会)

## ◎学会日誌

- ・2011年12月17日(土)  
研究会「地域連携と教育・学習環境」(香川大学)
- ・2012年02月18日(土)～19日(日)  
冬の合宿研究会  
「国際学会での発表スキルを磨くー伝わる英語発表ー」  
(大学コンソーシアムやまがた ゆうキャンパス・ステーション)
- ・2012年03月03日(土)  
研究会「情報モラル教育の実践」(山口大学)
- ・2012年05月19日(土)  
研究会「教育実践の研究とその成果」(秋田大学)
- ・2012年07月07日(土)  
研究会「ICTを活用したFD」(京都大学)

## ◎国際会議の案内

2012年

SITE 2012

<http://site.aace.org/conf/>  
(03/05-09, Austin, TX, USA)

IEEE WMUTE/DIGITEL 2012

<http://wmute2012.info>  
(03/27-30, Takamatsu, Kagawa, Japan)

ED-MEDIA 2012

<http://aace.org/conf/edmedia/>  
(06/26-29, Denver, CO, USA)

CollabTech 2012

<http://www.collabtech.org/>  
(08/27-29, Sapporo, Hokkaido, Japan)

CATE 2012

<http://www.iasted.org/conferences/home-774.html>  
(06/25-27, Napoli, Italy)

E-LEARN 2012

<http://www.aace.org/conf/eLearn/>  
(10/09-12, Montreal, Québec, Canada)

## お問い合わせ先 E-mail

- 論文投稿に関するお問い合わせ  
編集委員会 editor@jset.gr.jp
- 研究会の開催についてのお問い合わせ  
研究会事務局 study-group-core@jset.gr.jp
- 全国大会の開催についてのお問い合わせ  
大会企画委員会 taikai2011@jset.gr.jp
- 合宿研究会やシンポジウムの開催について  
のお問い合わせ  
企画委員会 kikaku@jset.gr.jp
- ニュースレター編集に関するお問い合わせ  
広報委員会 kouhou@jset.gr.jp
- その他のお問い合わせ  
学会事務局 office@jset.gr.jp

## 広報委員会

編集長：清水 康敬(東京工業大学)  
担当副会長：永岡 慶三(早稲田大学)  
広報委員長：南部 昌敏(上越教育大学)  
副委員長：矢野 米雄(徳島大学)  
監事：高橋 純(富山大学)  
委員：永田 智子(兵庫教育大学)  
石塚 丈晴(福岡工業大学)  
山田 智之(内田洋行)

E-mail : kouhou@jset.gr.jp

## 発行所●

日本教育工学会事務局  
〒141-0031  
東京都品川区西五反田1-13-7マルキビル  
TEL&FAX 03-5740-9505  
E-mail : office@jset.gr.jp  
<http://www.jset.gr.jp>  
郵便振替00180-2-539055

日本教育工学会ニュースレター  
No. 183  
2011年12月6日

発行人●会長 永野和男(聖心女子大学)